

## 熊本医科大学予科教授 魚住 衛略伝

上村 直己

### はじめに

熊本における明治・大正・昭和戦前期のドイツ語教育は言うまでもなく旧制第五高等学校を中心に展開した。周知のように旧制高校では外国語教育に最も重点が置かれていた。従って五高では語学(英語・独語)の授業時間数も現在の教養課程のそれと比較してはるかに多かった。当然ながら独語教師も多数に昇り多士済々であった。もし五高が存在しなかったら熊本のドイツ語教育界は実に寂しいものであったろう。だが、熊本のドイツ語教育を担ったのは五高だけではなかった。これよりずっと規模は小さかったが、熊本医学専門学校とその後身の熊本医科大学予科においても熱心にドイツ語が教えられた。そしてそれを中心になって担ったのが魚住衛であった。その功績は記憶されてよい。魚住が亡くなって久しいが、今では彼について語られることは殆どなく、全く忘れられた存在になっているといっても過言ではない。筆者はそうした状況を残念に思い諸資料を調査し、関係者に尋ね本稿をまとめた。略伝ではあるが、熊本のドイツ語教育に一生を捧げた魚住の生涯・業績・人となりを少しでも伝えられたら幸いである。

### 出生と家系

魚住衛(うおずみ・まもる)は履歴書<sup>1)</sup>によると、明治19年(1886)7月6日、当時の熊本県飽託郡清水村津浦140番地(現・熊本市北区津浦町)に生まれた。父は旧細川藩士・魚住賀衛(加賀流魚住氏)で、衛はその長男である。母は

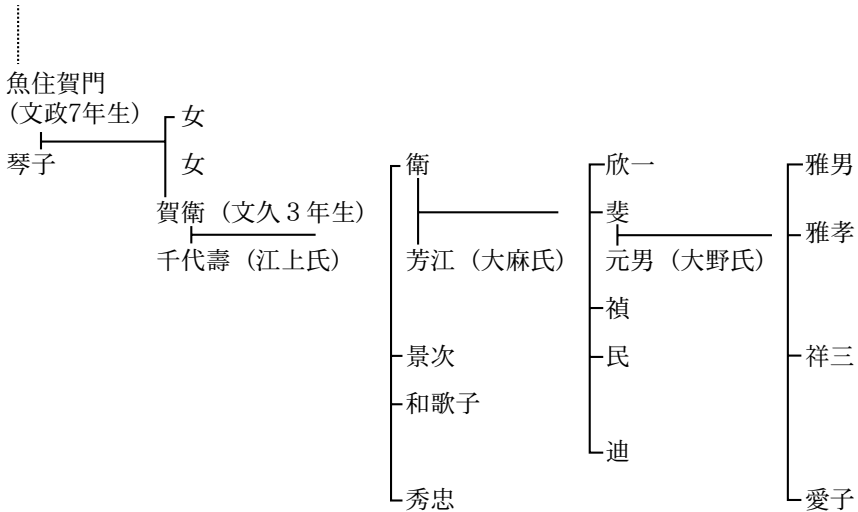
江上津直の四女千代壽（元治元年、〈1864〉10月生まれ）。実弟に後に工学士で、三井物産勤務の魚住景次（明治22年〈1889〉2月4日生）がいた。魚住氏の初代魚住加賀は豊前小倉藩の細川家に仕えていた武士であったが、その一族も細川忠利が寛永年間に初代熊本藩主として熊本に入りしのに従い入国した。これが熊本における魚住家が最初であった。魚住加賀は豊前国で亡くなったが、魚住家の菩提寺である安国禅寺（熊本市横手町）にその位牌はある。

魚住衛が生まれ育ち、また後年教師となっても住んだ魚住家の位置は次の通りである。壺川小学校の方から入り、瀬戸坂の方に曲がらず、坪井川に並行している道を行くと（途中、寺原自動車学校がある）、小高い山に突き当たる。道はそこから上り坂の小さな道と東に曲がり坪井川の橋に通じている道に分かれる。その角にその家はあった。

当時はそこでは一番立派な構えの家で、古くはあるが、目立っていた。

魚住衛の幼少期のことは殆ど不明である。従ってどここの小学校に通学したかも

魚住加賀（重章、魚住右衛門兵衛、後改め加賀、安国禅時に位碑アリ）



(魚住家略系図)

不明である。生家のあったの津浦から最も近い小学校は壺川小学校であるので、同校に学んだのではないかと想像したが、念のため存命中の衛の四女水岡<sup>みち</sup>迪氏に尋ねたところ否定された。これは、壺川小学校は熊本市にあり、魚住家は熊本市外の飽託郡清水村にあったためであろう。校区の関係で壺川校には通えなかったのではあるまいか。

## 濟々覺時代

魚住衛は下記に紹介する五高入学に際しての「選抜試験願」<sup>2)</sup>（入学願書）に添えられた履歴書によると、明治33年（1900）3月10日に熊本県立中学濟々覺に入学した。明治18年（1885）には当時私立の濟々覺には覺長の佐々友房の意向で熊本で殆ど最初にドイツ語教育が導入されたが、20年代になると次第にそ

履歴書	魚住衛 明治廿九年七月六日生	學業	一明治廿九年四月十日熊本縣立中學落し書入學 一明治三十四年三月九日老學年修業第二學年へ進級 一明治三十五年三月九日老學年修業第三學年へ進級 一明治三十六年三月九日老學年修業第四學年へ進級 一明治三十七年三月九日老學年修業第五學年へ進級 一明治三十八年三月九日老學年修業第六學年へ進級	業務	無し	賞罰	一賞罰無し 一中華學校校長に於て放校又除名セラルルナシ 右之通書送る之候也	明治廿九年六月吉日	右 魚住衛
-----	-------------------	----	--	----	----	----	---	-----------	----------

図版 1 五高入学願書に添えられた自筆の履歴書（五高記念館蔵）

の中心は第五高等中学校（明治27年第五高等学校と改称）に移っており、魚住が入学した頃はドイツ語科は既に廃止されていた。「熊本県中学済々黌規則」<sup>3)</sup>の「明治三十二年度学科課程表」を見ると、5年制で学科には倫理・国語漢文・英語・地理・歴史・数学・博物・物理・化学・習字・図画・体操があった。英語が最も重要視されていて、毎週の時数は第1学年6、第2学年7、第3学年～5学年はそれぞれ8時間と定められていた。英語の次に時間数が多かったのは国語漢文で、その次が数学であった。

これらの科目を履修して魚住衛は同38年（1905）3月31日付で卒業した。ここでその履歴書と済々黌長井芹経平による卒業証書を紹介しよう。

## 履 歴 書

魚 住 衛

明治拾九年七月六日生

### 学業

- 一、明治参拾参年四月拾日熊本県立中学済々黌ニ入学
- 一、明治三拾四年参月第壹学年修業第二学年へ進級
- 一、明治三拾五年三月第二学年修業第三学年へ進級
- 一、明治三拾六年三月第三学年修業第四学年へ進級
- 一、明治三拾七年三月第四学年修業第五学年へ進級
- 一、明治三拾八年参月参拾壹日卒業

### 業務

無シ

### 賞罰

- 一、賞罰ナシ
  - 二、中学済々黌ニ於テ放校又ハ除名セラレタル]ナシ
- 右之通相違無之候也

明治参拾八年六月壹日

右  
魚 住 衛

つまり魚住は済々黌に入学以来し、真面目に勉強したためであろうか、順調に進級し、放校や除名されることも明治38年3月末に無事卒業している。

次に井芹黌長による卒業証書は次の通り。

卒業証書

熊本県士族

魚 住 衛

明治拾九年七月六日生

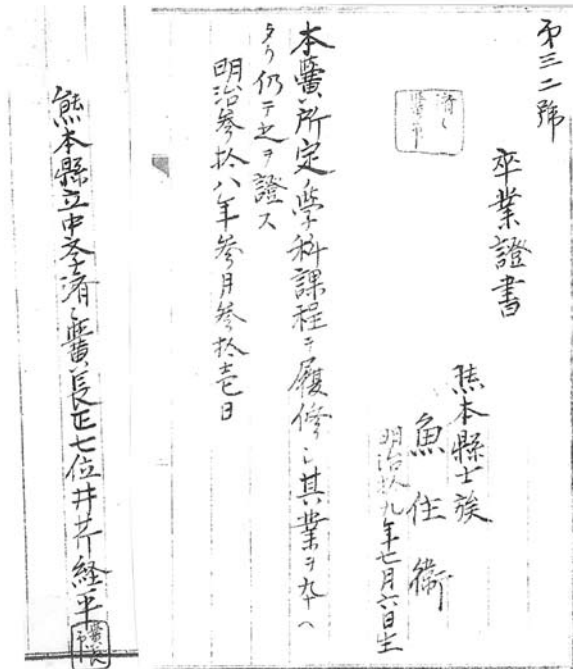
本黌所定ノ学科課程ヲ履修シ其業ヲ卒ヘ  
タリ仍テ之ヲ證ス

明治参拾八年参月参拾壹日

熊本県立中学済々黌長 正七位井芹経平<sup>印</sup>

明治38年6月1日附けの前記「選抜試験願」では魚住は次のように記している。

「私議高等学校大学予科第一部ニ入学志願ニ付選抜試験ヲ受度志望部類及入学志望学校学校ノ順位ヲ記シ履歴書、写真、熊本県立中学済々黌卒業証書（中略）相添此段相願候也」。そして「志望部類ノ順位」欄には第一志望第一部乙類、第二志望第一部甲類、第三志望第一部丙類とそれぞれ記し、「入学志望学校ノ順位」欄には第一志望第五高等学校、第二志望第一高等学校、以下第六、第三、第七、第二、第四各高等学校と記している。これによって魚住はこの時点で既に将来は第一部乙類、即ち文科又は法科に進む決心をしていたことが分かる。志望校につ



井芥經平清々普長による卒業証書（五高記念館蔵）

いては地元熊本の五高を第一にし、第二志望は東京の一高を考えていたことが分かる。また当時魚住が志望校のランキングをどう考えていたかも分かり興味深い。

### 五高大学予科（独文科）に学ぶ

かくして魚住は明治38年（1905）9月、第五高等学校の予科第一部（法文）に入学した。予科は3年制で、3年次になると英法科、英文科、独法科、独文科のいずれかを選択することになっていた。この時魚住は独逸文学科に属した。『龍南人物展望』（昭和12年）は五高時代の魚住について次のように記している。

「魚住は黒田〈源次〉<sup>4)</sup>とは丸反対で、極く温厚な人物であった。自宅通学で、

寮生活の体験がないから、逸話の少ないのは已む得ないが、弓道では相当鳴らしたもので、又尺八の名人だった。筆も立ち、文学の趣味のあるところから、東大では『帝国文学』の委員をやっていた。独文科は独法科と同室で、たゞ独語の特別講義だけが別だった。この講義は一週三、四時間で、クラス三人のうち、最後まで続いたのは彼だけだった。独語教授の長江藤次郎<sup>5)</sup>は、なかなか熱心な先生で、生徒がたったの一人になっても、決った時間にはキチンと教室に出て、彼の来るのを待ってゐる、だから彼は一寸風邪をひいても、授業を休む訳に行かない。教室で欠伸一つされないのが、随分苦しい目にあつたさうだが、五高の三年間、師匠一人に弟子一人の形で、ミッチリと独語を仕込まれた御陰で、大学でもグングン同輩を抜き、成績も頗る優秀だった。」(同書376-378頁)

これは主に3年次の大学予科独文科における魚住のことを述べたものだと思うれる。

熊本大学の五高記念館には1年次と2年次の成績資料が残されている。独語の点数(100点満点)と全科目の総点、学年全成績(平均点)及びクラスの席次について見てみよう。

#### 第一部第一年丙組 自明治38年至明治39年

国語・漢文・作文・演習	独	語	講	読	独	語	文作	会	独	語	会	書
	95	60	80	78	54	80	72	69	70	80	85	78

総点 636

学年全成績 71

席次 3 (全43人)

#### 第一部第二年丙組 自明治39年至明治40年

国語・漢文・作文・演習	独	語	講	読	独	語	文	作	独	語	会	書
	68	82	64	71	68	52	56	59	72	72	82	75

総点 691

学年全成績 69

席次 19 (全50人)

この資料によると、魚住は1年次で43人中で席次が3番と優秀な生徒であったが、2年次では50人中19番と下がっている。これはクラブ活動に熱中したせいかな。独語については講読・文法・作文・会話・書取と万遍なく平均していい成績を収めており『龍南人物展望』の記述を裏付けている。

『龍南人物展望』によると、独文科の卒業生は魚住を含め僅か3人で、その内、後年奉天医大教授になった黒田源次は魚住と同郷の肥後人で、大学では東西に別れたが、済々黌から五高までは同じクラスに机を並べた親しい仲であった。黒田は相愛社の領袖として自由民権を唱えた有名な有馬源内の次男で、玉名郡玉水村の黒田家の養子となった(同書376頁)。後年、黒田は多方面の研究を行った人物で、文学博士であった。もう一人は飯田亮<sup>6)</sup>という人だが、経歴等不明である。

独文科生が僅かしかいなかったためにみっちり鍛えられたが、反面不利なことも多かったようだ。五高の校友会雑誌である『龍南会雑誌』の明治38年11月号に「独文科生の不幸」という文章が載っている。署名はなく終わりに「夜の人」とあるだけで具体的名前はないが、独文科の内情を知っていることから書いたのは独文科生であると思われ、論調の激しさから判断して黒田源次と見てよからう。独文科生が少ないために独逸文学本来の講義が少なく独法科と合併授業が多いことに強い不満を抱き、せめて語学だけは別にして欲しいと述べ、図書室には独逸文学関係の書籍がかなり備えられていその点は感謝しているが、独文科生が度外視されているのは明らかであるという。教師に改善を求めたが、一向に実現されていないとして最後にこう述べている。

然れども月は逝き日は去りて、既に四十余日を経たる今日に至るも、猶杳とし更に消息なきは何ぞや、若し夫れ此状態を継続して、荏苒日を送り、此



最も意義ある一年を費さば、独文科生の不幸や、蓋し想像するに余りありと云ふべし、男子の襟懷、宏量海の如しと雖も、現在を考へ、未來を察して、豈一片の情なからむや、(中略) 吾人は賢明なる教勢の諸君を有する光榮にあらずや、人員の寡少なるの故を以て対岸の火災視せざる幾多の諸君を頭上に戴けるにあらずや、何を好んで縷々数千言を費やせる、蓋し是徒らに独文科生の不幸を地に吹聴して、同情を得んとするが如き、さもしき根性を有したるにあらずして、たゞ後進独文科生志望者のために大に猛省を乞ひ、彼等が不幸を再び踏混まざらしめんとするの衷心より出でたる一片の老婆心に過ぎざるのみ。(中略) 人員寡少なるの故を以て独文科生を軽々に看過し去るは、豈没分曉の甚しきものにはあらざるなからんや、吾人は淵に臨んで魚を羨むよりは、寧ろ退ひて網を結ぶの勝れるを思ふもの、若し夫れ吾人の希望をして網を結ぶの実を齎らすことを得せしめば、吾人は何んぞ淵に臨んで魚を羨むことを敢てするものならんや。

自分は独文科生の不幸を吹聴して同情を得ようというようなさもしき根性からこれを書いたのではなく、今後独文科を志望する者のために教授たちに猛省を乞いたいという。黒田源次と思われるこの著者はよほど正義感の強い人物であったようだ。たとえ独文科生が少数であったことから来る不利な点を感じていたとしても温厚な魚住にはこういう文章を書くことは思いもよらなかったに違いない。ともかくこの「独文科生の不幸」は当時の五高大学予科独文科の実状の伝える資料として貴重であり、また後年心理学から美術史に至る多方面研究を行い、国際的にも活躍した黒田源次の若き日の情熱や正義感を物語る資料として興味深い。

さて、熊本大学の五高記念館に卒業生の学籍簿が所蔵されているが、魚住のそれには次のように記されている。

氏 名	魚住 衛
生年月日	明治19年 7 月 6 日

原籍族	熊本 飽託郡黒髪村 五六三番地 士族
入学年月日	明治38年8月4日
入学部類	第一部乙類
入学前の修業学校	熊本中学済々黌
退学年月の理由	明治41年7月1日 卒業
徴兵二関スル事項	明治39年2月24日在学証明書交付
進入大学	東京文科大学
保証人住所氏名	熊本飽託郡清水村133番地 江島永年

保証人の江島永年は近所に住む知人ないし友人であったと想像されるが、経歴等全く不明である。

## 東大独文科時代

魚住は明治41年(1908)7月五高を卒業すると上京し、同年9月15日東京帝国大学文科大学独逸文学科に入学した。当時の独逸文学科の主任はカール・アドルフ・フローレンツ(Karl Adolf Florenz, 1865-1939)であった。フローレンツは日本学者として有名であるが、初期の日本の独文学の指導者としても功績も大きい。助教授は上田整次、講師は青木昌吉であった。

同大学独逸文学科の出身者には明治24年(1891)の第一回卒業生の藤代禎輔、菅虎雄以来、上田整次、登張信一郎(竹風)、青木昌吉、片山正雄(孤村)、桜井政隆(天壇)、山岸光宣、雪山俊夫、大津康、小牧健夫、林久男など錚々たるゲルマニスト(独語・独文学者)がいた。そして魚住の1級上には後に五高教授次いで二高教授となり、また多くのドイツ語関係の著書・対訳書を残した佐久間政一や新聞研究で有名になった小野秀雄がおり、2級上にはグリム童話の翻訳で知られた金田鬼一(のち学習院教授)や、魚住より一足先に熊本医学専門学校の教授となった成田秀三がいた。なお1年後には、後年一高教授となった立沢剛、熊本県出身で五高教授となった松尾精一が入学した。

当時の『東亜の光』の「彙報」欄によると、3年間にわたり独文科では次の通りの講義が行われた。

明治41年9月～明治42年7月

Praktische Übungen	フローレンツ
Stilistik, Metrik, Poetik	同
Geschichte der Deutschen Literatur	同
Moderne Lyrik und Balladen Litaratur	同
Moderne Drama	同

明治42年9月～明治43年7月

Praktische Übungen	フローレンツ
Hebbel und Gutzkow	同
Otto Ludwigs Werke	同
Einleitung in die deutsche Philologie	同
Hauptmann (Drama)	同

明治43年9月～明治44年7月

Schillers Wallenstein	フローレンツ
Modern Ger. lyrics	同
Lessings Werk	同
History of Ger. Literature	同
Goethes Faust	同
Sudermanns Realistic Dramas	同

以上は主任教授のフローレンツの講義であるが、ほかに助教授の上田整次と、上田の留学中は文学士青木昌吉も週2時間程度訳読を受け持った。明治43年(1910)5月号『独逸語学雑誌』(精華書院)の「学校だより」欄は「東京文科大学独文科」を取りあげて詳しく紹介している。この時魚住は2年次生であった。「教師と教授振り」について次のように記している。

教師としても独文科専門のはFlorenz博士と文学士青木昌吉氏二人きりである。フロレンツ博士は誰も知て居る様に本邦に於ける独逸文学の開祖とも謂ふべき人で「独文科のフロレンツかフロレンツの独文科か」と云はれる程全く一人天下である。従て苟も独文科に籍を置く者は大将に睨まれたら最後到底浮かぶ瀬はない、と云ふと如何にも冷酷な毛唐の様に聞こえるが、中々以て豊顔短軀、愛嬌ある態度に親切な教授振り、おまけに稀有の精勤家と来て居るから学生も「フロ公」「フロ公」など陰口を利きながらも余程敬愛して居る様である。博士は日本に渡て来てからモー二十年近くなるのであるから其の独逸語も余程日本化して居るからそれだけ吾々には解り易い。特に又日本文学をを非常に趣味を以て研究せられた結果、江戸文学などには恐ろしいほど精通して居られるので是が為め文学博士の学位を受けられたので外国人で我国の学位を有するなど実に異数である。先年来博士がLeipzig大学の日本文学講座担当のため帰国せらるゝとか云ふ噂あるが吾人は我が独逸語学界の大恩人たる博士を失ふことなからんことを望むものである。青木文学士は博識寡言の良教師で其の文法に精しことは世に定評あり。矢張り矮軀肥大の体格で講義振りは一本調子、諄々として飽くことを知らないと云ふ方である。主に一年級の受持で訳読が多く特殊の講義はない。昨秋助教授上田整次氏洋行の後を襲ふて就任せられたので日尚浅く何等の評判も無い様である。

さらに授業については「二三級の教室のぞき」と題して次のように記している。

二年三年は合併教授で二年級へ青木文学士が一週二時間出講せらるゝ外は凡べてフロレンツ博士の受持である。本年度の出し物はHebbel(2) Ludwig(2) Gutzkow(1) Hauptmann(2) といふ十九世紀物ばかりであるから19Jahrhundertjahrと謂てよい位である。既に完了になったもの及び着手中のものはHebbelのMaria Magdalena, GutzkowのUriel Acosta, LudwigのMakabar, Zwischen Himmel und Erde, Heiterlei,

HauptmannのWeber, Fuhr-mann Henschel等でHauptmannは三年級だけの為め、二年級は別に青木先生からKleistのPrinz von Homburgを課せられて居る。而してHauptmannの作中特にWeberを選んだのはSchlesienのDialektが非常に多くして学生のSelbststudiumに困難なると及びWeberは所Schilderungsdramaとして最も研究の価値あるが為めで、Fuhrmann Henschelはフロレンツ博士の見解に於てHauptmannの傑作であると云ふに基くのであるそふな。此の外に一週二時間Philologieの講義がある。各品詞（Wortarten）に就て其のurprünglichの研究であるが、フロレンツ先生は非常に熱心なもので此の晦渋難解の代物を縦横に述べ立て盛んにsehr interesannt!なる間投詞を浴びせ掛けられるが、聴く方の側では是れが又sehr langweilig!!て二時間を無我夢中で通すのもあれば、煙に捲かれて往生するものもある。特に二年級の連中などは全然「傍聴」だと呼んで顧みるものもない位だ。それかと云て誰もPhilologieの価値を認めない訳はないが何分感想無味で難物と来て居るから斯う云ふ結果になるのだ、それでフロレンツさんは執念（深）く攻撃されるので一年級あたりへも之がetykologische Forschungとなって鋒鋦をあらはすのである。

こうした講義や講読を受けた魚住がそれについてどのような感想を抱いたかは興味あるところだが、彼自身はそれについて何も語っていない。

## 『帝国文学』委員となる

『帝国文学』は学術・文学雑誌で、編集は帝国文学会内から選出任命された委員会で行われた。

魚住は明治41年（1908）10月、帝国文学会に入会した。<sup>7)</sup>そして2年後の同43年（1910）8月その委員となった。同43年8月号『帝国文学』（第16年8号）の「消息」欄には次のような広告が掲載されている。

△本会委員の更迭久しく本会の委員として本誌上に勇健の筆を振はれたる吉川秀雄、折竹錫、内藤濯、黒田朋信、栗原武一郎の諸氏は今回席を新進の士に譲られ、新たに和辻哲郎（哲）田波御伯（英）佐藤貞一郎（仏）魚住衛（独）抽利（国）の諸氏新任、今後は此等新進の作家が健筆は本誌にあらはれて読者に見ゆべく猶前委員諸氏も相不変従前の如く本誌に金玉の文字を寄稿せらるべし。

これ以後魚住の『帝国文学』への寄稿が始まり、盛んになっていった。魚住は同誌に次の9篇を寄稿している。

葬儀屋（プーシキン）	第16巻 8 号	明治43年 8 月	49-57頁
女とはどんなものか	第16巻 9 号	明治43年 9 月	25-31
民謡詩人フリッツ・ロイテル	第16巻12号	明治43年12月	35-38
輓近独逸絵画論	第17巻 3 号	明治44年 3 月	18-26
逝けるシュピール・ハーゲン	第17巻 4 号	明治44年 4 月	72-76
天才詩人クライスト	第17巻11号	明治44年11月	26-33
日本の演劇	第18巻 2 号	明治45年 2 月	1 - 8
<small>あなぐら</small> 窖（アルテンベルヒ）	第20巻 8 号	大正 3 年 8 号	15-17
現代独逸戯曲の様式	第20巻 9 号	大正 3 年 9 月	21-37

「葬儀屋」以外はすべて魚住<sup>ろそん</sup>樫村の筆名を用いている。<sup>8)</sup> 以下簡単にその内容を紹介しよう。「葬儀屋」はロシアの劇作家プーシキンの原作を独訳から訳したもの。明治から大正初期にかけて、ロシア文学や北欧文学がその独訳本を通じて主としてドイツ語畑の人たちの手によって盛んに日本に紹介された時代であり、魚住のこの訳もその一環であったと見てよからう。

「女とはどんなものか」には前書きに「独逸新刊の或長編小説の、序篇だけを訳したものである。匿名で発表されてゐるけれども、作者が現代新進大家の一人である事は慥である。」とある。「女とはどんなものか」「男とはどんなものか」「結

婚とはどんなものか」などと続き、ベシミズム思想を述べている。魚住がどういう意図でこういうものを紹介したのか不明である。

「民謡詩人フリッツ・ロイテル」はドイツの民謡詩人フリッツ・ロイテル (Fritz Reuter, 1810-1874) の生誕百年祭が11月7日に出身地のシュタフェンハーゲン (Stavenhagen) において銅像の除幕式と共に盛大に举行されたニュースを聞いて執筆したもので、詩人の小伝である。作品を紹介したうえで「卓越せる民謡詩人として、方言詩の先駆者としてロイテルの独逸文学に遺した功績は尠少ではない。今日詩人の出生地に其銅像が建設せられて、詩人の風姿が永久に欽仰されるやうになったのも決して偶然ではない」と結んでいる。

「輓近独逸絵画論」は文学との関連でドイツ絵画を論じたものである。最後に「クンメル氏所論抄訳」と付記されている。

「逝けるシュピール・ハーゲン」は「海外騒壇」欄に掲載された。シュピールハーゲンが1911年 (明治44) 2月に死去したとの報に接し筆を執ったもので、彼の生涯を記し、作品については3期に分けて代表作を論述している。そして結論として次のように述べている。

「シュピールハーゲンは、熱心なる自然主義反対者で、殊にゾラのエキスペリメンタルロマン実験的小説に極力反抗した。其著『日曜児』は独逸小説の本質を示す意気込を以てかいたものである。彼が自然主義反対者であると云ふ理由の下に直ちに、彼を以てロマンチストだと云ふ訳にはゆかない。只彼は詩と現実の存在とを同等の地位に置かうと企てたばかりで、彼の詩人的素質は現実を支配しては居ない。彼の理想的活動は個人的感覚を客観化し詩化して、彼の個性が主観的に現はれてゐると云ふ迄である。

純芸術主義の立場から観ると、シュピールハーゲンの製作の動機及態度は非難されるべきもので、先にも述べた如く彼の政治的経済的思想と、倫理観などが、芸術的製作の障碍となつて、甚しく芸術的価値を減じて居る。彼の作物は皆多少の傾向を有して、傾向小説と称すべきものであるが、併し其傾向は時代を包括し反映すべき大傾向であるから斯の如き傾向は強ちに排すべきものではない。

自然主義全盛期後、彼の名声は聊か墜ちて、飽っばい読書界は、もう此老小説家を忘れかけやうとして居たが、兎も角も十九世紀後半に玉振した一大小説家として、シュピールハーゲンの名は不朽である。」

「天才詩人クライスト」はクライスト没後百年に相当するといことで筆を執ったもの。ドイツ本国は勿論、世界各地でも関連の記念の催しが行われるであろうが、時に京都の『芸文』が特別に記念号<sup>9)</sup>を出したのは美挙といつてよく、嬉しく思うと前置きしてからこの種の雑誌としてはかなり詳細な評伝を記している。そして最後に次のようなクライスト観を述べている。

「世人応々詩人の初期の作物に病的思想が現はれてゐるのを指摘して、詩人を一種の精神病者の如くいふ者があるが、それは大なる誤りである。芸術家が人間の病的思想を作物の上に現すには、必ずしも自ら病的なる事は要しないのである。クライストは多感多涙、熱し易く冷め易いので、一見薄志弱行の徒の如く見えるが、彼の本性は烈火の如き意気と、不攘の力に充ちたもので、レッシング、ベエトフェン、シルレル等に比すべき、勇敢な生の奮闘者であつた。

放浪多年輻輳不遇、一人の知己を有せず遣る瀬なき悶々の情と、祖国の屈辱を座視するに忍びざる火の如き愛国の至情は駆って此天才詩人を、憤死せしめたが、百歳の後祖国普魯士の今日の隆を見、後進知己の天才詩人として渴仰の標的となれるを知ったならば、泉下の詩人は満足の微笑を禁じ得ない事であらう。」

「日本の演劇」は雑誌の巻頭に置かれている。魚住によれば、最近外国人による日本演劇観が発表されているが、多くは迂闊極まるもので、根拠のある議論として我々を首肯させるものは見当たらないという。だが最近読んだベルンハルト・ケラーマン<sup>10)</sup>の「日本演劇論」は見るに足るべきもので、多少の誤解もあるが、とにかく日本の歌舞伎を外国人がどう見ているかを知ることができると思う。こう述べてケラーマンの論文を翻訳している。ケラーマンによると西洋劇が事実、真理、深味、精神等を表すのに対し、日本劇（歌舞伎）は単に皮相、比喩、幻象等を表すに過ぎぬ、欧州劇は人間を示すが、日本劇はただ人間らしい幻象を示すばかりである。少なくとも一見したところではそう見える。こう前置き



してからケラーマンは日本劇の特質を西洋劇と対比しながらかなり詳しく論じている。

「現代独逸戯曲の様式」において魚住は「Stilを直ちに所謂歌舞伎の型の意味に解する事が妥当でない事はいふ迄もない。楠山（正雄）氏の言を借りていへば戯曲の『Stilは天才の創造なしには、又は時代の生活の大きな背景なしには、そして相応に長い試練なしには生れるものではない』と述べる。そしてStilの訳語として様式が最も適当であるか分からないが他に適当な訳語も考えつかないので仮に様式と訳して置くとする。以下、魚住は最近読んだユリウス・バウプ<sup>11)</sup>の「現代独逸戯曲に於ける様式傾向」に頗る教えられたといい、戯曲における様式ということに注意が喚起されている我が国の文壇の現状からいっても、このすぐれた劇批評家の様式観を紹介するのは無駄ではあるまいとし、ゲルハルト・ハウプトマン、ホーフマンスタール、ヴェデキント、オイレンブルク、エルンストなどの作品に現れた様式観を窺っている。

この時期キリスト教系の『六合雑誌』の第372号（明治45年1月）にも、ヘッベルの「夜」(*Die Nacht*) という短編小説を翻訳し寄稿している。あらすじは次の通り。主人公パウルは夜、暖炉の前で盗賊小説を読んでいると、兄のフランツが突然訪ねてきて、今から市へ行ってくれと強く要望された。こんな深夜に2里もある道を出かける気にはなれなかったが、大至急の用だから是非行ってくれというし、傍にいた母も、お前のお父さんはどんな骨折りも厭いはしなかったよ、と強く促した。それでパウルはしぶしぶ犬を連れて出かけた。途中暗闇の雪深い道で足を取られ、またうす気味悪い鴉の鳴き声に悩まされながら進んでいった。また「パウル、パウル」と後ろの方で彼の名を呼ぶ声がした。悪名高い盗賊に後を付けられたと思い、市に着くと夜警に知らせて掴まえてもらったが、それはパウルの間違いで燈火に照らすと盗賊ではなく仲良しの友人ヤコブであったと知って驚いた。「さうか、さうと知ったら、一緒にこられたんだがね」といのが落ちだった。

明治末から大正初期にかけて独語独文学者の間で劇作家ヘッベルについて関心が集まり、生誕百年を迎えたのを機に「独逸のイブセン」として日本に紹介しようと特集号を出した雑誌<sup>12)</sup>もあった。ヘッベルとしては軽いものだが魚住の翻訳もそのような流れの一環と見てよかろう。

なお『六合雑誌』第378号(明治45年7月)には「新夫婦」というビョルンソン作の戯曲を寄稿している。1幕5場の家庭劇で、ある官吏夫婦と新婚の娘夫婦の間で日常の様々な出来事を巡って話が展開する。魚住の芝居好きの一面を窺わせる作品と言えよう。ビョルンソンはイブセンと同じくノルウェーの作家で、共に明治後期から大正初期にかけて独訳または英訳を通して翻訳され日本にも盛んに紹介された。魚住訳『新夫婦』もやはりそうした流れに沿った作品であったと見てよかろう。

明治44年(1911)7月魚住は東京帝国大学文科大学独逸文学科を卒業した。そして文学士となった。卒業論文は「独逸に於ける自然主義」であった。参考までにこの時に一緒に卒業した人たちの卒論のタイトルを挙げると次の通りである。「オット、ルードヴィヒ著マッカベヤーに就きて」(犬塚一郎)、「ゾーデルマンの世界観より見たる彼のキリスト劇」(石井忠純)、「独逸悲劇アグネスベルナウエル」(畑一枝)、「ゾーデルマン作メドスエンデに就て」(小野沢百八)、「デル、ミンネザング ヴァルテルス フォン デア フォーゲルワアイデ」(吉武真実)。

さて、明治45年4月号の『帝国文学』の「消息」欄に次のような興味ある記事が掲載されている。

△帝国文学会新旧委員懇談会は予報の如く三月一日夕伊予紋子開催、この日小雨はらはらと降りて春宵一段の情趣を添へたり。定刻に至るや小林委員一場の挨拶を述べ次で宴に移る。創立以来十八年間の新旧委員に評議委員を加へて二十二名、何れも意気軒昂、盃をふくんで或は旧を語り、或は現文壇を評し、三教問題に、文芸院問題に、論議漸く盛なり。この間八重英等十余名の絃の音響き、歌謡きこえ各々歡を尽くして散会せしは十時半をすぎる頃

なりき。当日会社亦この挙に賛して村田支配人も出席あり。たゞ芳賀矢一氏  
岡田正美氏大町芳衛氏等が差支にて来会なかりしは遺憾なりき。

当日の出席者左の如し。

上田 万年	高津鍬三郎	姉崎 正治	上田 敏
武島又次郎	佐々 政一	藤岡 勝二	青木 昌吉
久保 得二	八杉 貞利	樋口 秀雄	笹川 種郎
尾上 八郎	小山内 薫	栗原 元吉	小林 愛雄
黒田 朋信	和辻 哲郎	佐藤直次郎	魚住 衛
抽利 淳一	村田 五郎		

ここには学界や文壇の大家・新進の名前があり壯観だが、彼等もかつて帝国文学会の評議員や委員であったことは雑誌『帝国文学』が当時の持っていた影響力の大きさと功績を改めて知らされる。それだけに魚住にとってその委員であったことは意義深いし、彼自身も誇りに思っていたことは容易に想像される。

だが、翌年 9 月には魚住は一年志願兵として服役することになり『帝国文学』の委員を辞任した。<sup>13)</sup>

## 私立熊本医学専門学校教授に就任

履歴書によると魚住は大学卒業後、大正元年（1912）12月1日より一年志願兵として歩兵第二十三連隊に入隊し服役した（同 3 年 5 月30日まで）。これは以前、五高在学時代に在学証明書を出して徴兵を免れていたもので、その埋め合わせとして志願したのではあるまいか。第二十三連隊は熊本の第六師団に属していたので郷里で服役していたことになる。だがこの間の具体的動静は全く不明である。ただしそのお陰で除隊後、魚住は大正 3 年（1914）8 月24日付で私立熊本医学専門学校講師に任命されことになったと思われる。熊本医学専門学校は明治37年（1904）2月に設立認可を受け、同年 9 月に入学式を挙行、15日より授業を開始した。独逸語学は開校以来ずっと独人オイゲン・ガンテル、上田茂次郎、陸



魚住 衛（私立熊本医学専門学校卒業記念帖，大正4年）

軍教授中台重躬（ちゅうだい・しげみ），成田秀三<sup>14)</sup>，ヨセフ・ブラウトらが教授や嘱託講師として担当していた。

そこへ魚住が新たに赴任した。大正3年12月の『熊本医学専門学校校友会雑誌』（第15号）は「魚住文学士来任」と題して次のように報じている。

「東大独逸文学科出身にして東都文壇にその名を知られし文学士魚住衛先生（熊本県出身）は，今般吾校講師として就任せられ，専ら独逸語教授の任にあたられ，令聞高かりし先生の深遠なる学識に接せんとするは吾らの大に誇とするところなり」

一方、『鎮西医報』第155号（大正3年9月30日発行）の「雑報」欄では「○魚住文学士」と題して，

「東大独文科出身ノ文学士魚住衛氏（熊本県）ハ今般熊本医学専門学校講師トシテ就任シ専ラ独乙語学教授ヲ分担セラル。

因ニ同校講師中台重躬氏ハ願ニ依リ嘱託ヲ解カレタリト云フ」

と報じた。これにより魚住は中台の後任として採用されることが分かる。中台は旧世代のドイツ語学者であるが、また魚住のように文学士の称号こそなかったけれどドイツ語に関しては実力的には決して劣る者ではなかった。

翌年2月の『熊本医学専門学校校友会雑誌』(第16号)は「魚住先生教授任命」と題して次のように報じている。

「先きに本校講師として来任せられたる文学士魚住衛先生は十二月中旬本校教授に任命せられ従前の通り独逸語を教授に専ら勤められる。」

大正4月9月22日には生徒監を兼任することになった。これ以後魚住は独語のほかに修身講話を受け持った。

私立熊本医学専門学校時代の明治42年当時は、ドイツ語の週授業時間数は第一学年8時間、第二学年から第四学年までは各4時間であった。それが大正3年に学則を改正した。<sup>15)</sup> 要点は従来毎年9月11日に始まって学年を4月11日に始まることに改正し、入学期も毎年4月とした。また学科課程表にも2,3の変更があったが、主なものは独語の教授時間数の増加であった。すなわち従来の全学年を通じて毎週20時間であったものを24時間に改め、殊に第一学年においては十分その素養を深くするため毎週12時間を課すことに改めた。そして第二年6時間、第三年、第四年は各3時間となった。これは大正8年(1919)9月校名を熊本医学専門学校と改称しても変わらなかった。なお、熊本医学専門学校で、どういう独語教科書が使用されたかは記録がなく分かっていない。

## 論文「大戦後の独逸劇壇」

ここで魚住が五高(熊本)の校友会誌『龍南会雑誌』(大正3年[1914]11月号)に寄稿した論文「大戦後の独逸劇壇」を紹介したい。これには五高の校友会雑誌部に乞われて執筆したものとの付記がある。魚住が『龍南会雑誌』に寄稿したのはこの1編だけである。

本論に入る前にまず押さえておかなければいけないのはこの論文は第一次大戦中に書かれている点である。冒頭で魚住は、気の早い批評家の中には、「独逸劇

壇の退歩」「独逸演劇の衰頹」を叫んでいる者もいるが、輓近の独逸劇壇の隆盛は実にめざましいものがあるとして次のように言う。

「前世紀の八十年代から今日に至るまでは演劇の黄金時代である。戯曲文学の全盛時代である。自然主義の出現以来、独逸の劇壇は波瀾重畳の状況を呈し、百花爛漫の美観を現し、幾多の新様式を戯曲が現れた、これ等の数多い戯曲の中には駄作もあるだらう、新しがり過ぎた結果は、全く邪道に陥った、えたいも知れぬ愚作もあるだらうが、兎も角も、外面的にいつても、内面的にいつても、文学史上未曾有の隆盛を極めてゐる。」

そして次にその隆盛振りを数的に窺っている。

1908年においてドイツの劇場組合に加入している劇場だけで381座であった。そして1899年9月1日より1908年8月31日までの上場回数は次の通り。(かっこ内の数字は興行回数を示す)

Schiller, Maria Stuart (181) ; Jungfrau von Orleans (119) ; Die Braut von Messina (65) ; Tell (244) ; Demetrisus (25).

Goethe, Faust, zweiter Teil (204).

Kleist, Der zerbrochene Krug (52) ; Das Käthchen von Heilbronn (65) ; Prinz Friedrich von Homburg (47).

Grillparzer, Die Ahnfrau (43) ; Sappho (45) ; Medea (40) ; Des Meeres und der Liebe Wellen (47) ; Der Traum ein Leben (28) ; Weh dem, der lügt (28) ; Die Jüdin von Toledo (36).

Wolff, Musik von Weber (55).

Laube, Graf Essex (26) ; Die Karlsschüler (34).

Gutzkow, Uriel Acosta (46) ; Zopf und Schwert (23).

Freitag, Die Journalisten (120).

Brachvogel, Narciss (30).

魚住によれば、以上はこれら9人の作家の或る特定の作品の約10年間における興行回数で、その他の作品で興行回数10回に満たないものは加えられていなく、

かつこの外の作者の作が無数に上演され、その中には一つの作品が興行回数百回を越えるものが稀ではないという。而もこの時期は新しい演劇運動も盛んな頃で多くの新らしがり屋は、上掲の作品（1880年以降の作品は一つもない）などは鼻につくとして振り向こうとしなかった時代であったことを考えれば、思い半ばに過ぎるだろとしている。

このようにドイツの演劇は隆盛を極めていたが、一方で盛んに外国作家の作品も上演された。イブセン劇の盛況は誰でも口にするが、その上演回数を見れば驚かざるを得ないという。1900年から6年までをアレンジして示そう。1900（376）、1901（331）、1902（323）、1903（406）、1904（459）、1905（572）、1906（932）。

以上は少ない材料によって現代独逸演劇の隆昌の一端を窺ったに過ぎないが、兎に角現代独逸は実に戯曲演劇の黄金時代であるとした後、次のように述べている。

「独逸は今や乾坤一擲の大活劇を演じてゐる、世界の列強を敵手にしての振古の大戦に遭遇してゐる。此未曾有の大戦争に於て、独逸が勝つか、敗けるか、（中略）戦勝は果して、どういふ結果を独逸文学に齎すだらうか、敗戦は果して如何なる影響を文学に与へるだらうか、これ等は私共にとって頗る興味ある問題である。」

既にこの問題は諸家により論ぜられており、大体所見は一致している。即ち、大勢上ドイツの敗戦は明白である。戦争には敗れてもそれによって直ちにドイツ民族の衰頹を意味するものではない、戦敗後のドイツの学術文芸が俄然衰微して、世界の文芸、学術の中枢がドイツを去って他国へ移るようなことはないだろうというのであるが、自分も全く同意見であるという。無論、ドイツが国を賭して全力を挙げて振古の大戦を試みたのであるから、その戦敗の損失は物質的にも、精神的にも莫大なものになるに違いないし、文学美術に一挫折を来すのは免れないであろうが、それは決して、皮相な観察者たちが推測するほど大なるものにはならないだろうと魚住はいう。だがさらに次のようにも述べる。

「上述の如く大体に於て、文学美術に対する戦争の影響は存外に僅少であって、戦争の為に独逸の文学美術が一朝にして、取るに足らぬ見すばらしいものにならうとは想像されないのであるが、私は劇文学の愛好者として、現今まで、かばかり隆昌を極めてゐた独逸劇壇が大戦後、果してどうなり行くだらうと憂慮し懸念しないではゐられないのである。」

これ以降魚住は大戦後のドイツ劇壇がどうなるかを想像してみたいとして話を進める。

そのためにはまず前回の大战、普仏戦争後の劇壇の観る必要があるという。当時ドイツは連戦連勝、ついに敵国フランスの首都に迫って敵国を屈服させ、ドイツ帝国を建設し旭日昇天の勢いであった。この国家の隆運に伴って文芸も一大活躍するだろうということは誰しも期待するところであったが、この期待は全く水泡に帰した。「此光榮ある新帝国の文壇にふさはしい戯曲などは一つも現れなかった。意気地のない当時の戯曲家は、仏蘭西の愚劣極まる戯曲を模倣する事を能事と心得てゐた。」ゲーテ、シラーの作品もなお儀式的に演ぜられたが、それは全く作品の精神を没却した、目先の表面的効果をねらった、つまらない演出法だったという。魚住は言う。「種々の関係もあらうが、これを観ても、戦勝後、国家の興隆は、必ずしも、文芸の隆盛を齎らさないといふ事がわかるだらう。又戦敗国が政治的衰頹が、必ずしも文運衰亡の主因とはいはれないのである」と。

ここからは第一次大戦後のドイツ劇壇についての話になる。ドイツの敗戦を予想して、それを基にして論を展開する。それは敗戦の程度によって大いに異なるので、まずその程度を想像してみなければならぬ。ドイツが連合軍に蹂躪されて、ドイツ帝国が瓦解すれば無文学の演劇のという騒ぎではない。しかしながら、公平な観察からは、自分は欧州においてドイツは五分の戦争をしていると思うと魚津は言う。こういう形勢が永続して終いには疲れて引き分けというような事になって梟がつきそうにも思われる。だが大勢から考えると、ある程度の敗戦は到底免れまい。もしドイツの戦敗が、自分が想像する程度のものとすれば、戦後のドイツ文芸は然程<sup>さほど</sup>の打撃は受けないであろうし、その劇壇に及ぼす影響も世人が

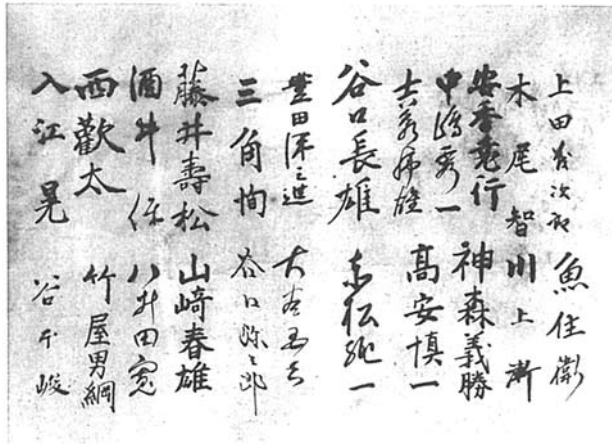


想像するほど大きくはないだろう。だが劇壇のことは小説や詩歌とはやや趣を異にし、劇場や観衆の関係があるので単純には考えられないとして結論的に次のように述べる。

戯曲はまづ現今の盛況を継続する事が出来るだらう。現代の文学は現代人の内部生活の表現である、現代人の主義の叫でなければならぬ。それは何者も妨げる事は出来ない、何者もこれを押しつける事は出来ないのである。而も最近の思潮は単なる破壊、単なる懷疑の時代を過ぎて、明かに建設の一面を具へ、真面目に、自然人生の問題に対し、徹底的に行けるだけ行き、進めるだけ進み、そこに新しい何物かを掴まうとする精進努力の澆刺たる生気を有する時代である。かやうな精神活動のめざましい現代独逸の文芸が、一戦敗の為に、萎縮沈滞して、見すばらしいものにならうとは思はれない。(中略) 併し乍ら、戦争の程度が、先きに私が想像したやうなものとするれば、一時戦敗の為に受ける経済上の打撃が可なり重大なものであつても、あの堅忍不撓の国民性を有する独逸人が、それでへたばつて了はうとは思はれない。必ず此年ならずして戦後の不景気を挽回して余力或は一層の経済的繁栄を来さないとも限られない。

さうなれば劇場は必ず繁盛する、現代の演劇熱の情力は、必ず公衆を劇場にひきつけないではおかぬだらう。之を要するに、戦後の独逸劇壇はその戦敗の直後にありては多少の影響を受けて一時は稍不振の景況にあるかも知れないが、間もなくそれは恢復せられて、さ程の創痕にはならないだらうと思ふのである。

最後に魚住は「以上は只私の漫然たる想像に過ぎない、寧ろ妄想であるかもしれない云々」と非常に謙遜している。だが全体的には魚住の予想は当たっているようだ。ただ敗戦によりドイツが受けた影響は彼の予想よりはるかに大きかった。ドイツ帝政は終わり、ヴェルサイユ条約により莫大な賠償を求められた。だ



私立熊本医学専門学校卒業生アルバムに寄せた教授たちのサイン (大正6年)

が「堅忍不撓の国民性を有する独逸人」の努力により比較的早く立ち直ってワイマール共和国時代を迎えた。演劇に関しては魚住の予想したように進んでいったと言ってよいであろう。それはやがて「ワイマール文化」と総称される文化芸術の中でも重要な位置を占めることになる。さらにその影響を受けた、彼が予想しなかった新しい大衆文化である映画が勃興してくる。

魚住がこうした論文を書いたのは、自身告白しているように彼が「劇文学の愛好者」であったことが大きいと思う。前半では大戦前のドイツ演劇の隆盛ぶりを数字を挙げて示しているが、出典は示していない。これは卒論「独逸に於る自然主義」を執筆する際に収集した文献資料に依拠したものではあるまいか。

こうしたドイツ文学に関する論文のほかに、魚住はこの頃大正7年の『熊本医学専門学校校友会雑誌』(第25号)の「文苑」欄に「先哲医言録」なるものを寄稿している。医学や医者に関する先哲の箴言11章を紹介したものである。例として3章を引用しよう。

医学は老年に至りても愈る可からず。然らざれば固陋にして日新の功な

く、往々譏を大方に取ることあり。治療さへ巧者になれば学問はせずともよし杯と云へるは文盲の人の遁辞なり。唐の甄権は百歳余に成りても分らぬこと多しと云へり。(椿庭遺稿)

予は、諸君が一度、最も尋常なる病症を経験せられむ事を望む。されば諸君は、如何に患者を取扱はざる可からざるかを、速に且善く、学ぶならむ。(Kussmaul.)

死を予告するとは、死を与ふるの義なり。斯の如きは決して、只生命延長の為に存在する者の職務たり得ず、又職務たる可からざるものなり。たとへ患者が、自己の事業を整理し置かざる可からず等の口実の下に、真実を知り度しと望む場合と雖も、決して直ちに死の宣告はなす可きものにあらざる也。(Ditto.)

魚住が医者や医学生に対してこうした先哲の箴言を紹介したのは、単に自分がドイツ語だけでなく修身の科目も受け持っていたこととも関連があらう。

さて魚住は大正6年家督を相続し、この頃結婚した。妻はヨシエ（明治27年4月生）と言った。大麻幸三郎の二女で、熊本県立第一高女出身。

ここで当時五高の教授であった高木市之助（国文学）が語っているエピソードを一つ紹介したい。

もう一人、ドイツ語の佐久間政一<sup>16)</sup> という私より少し先輩がいました。彼は後に二高へ移り東北大の講師などをしていましたが、昭和初期に死にました。私がドイツへ行った時にちょうどベルリンにいて、いろいろな所をひっぱりまわしてくれ、お芝居などを見せてもらったが、酒好きで気性のあらい、そしてよくできる人でした。Uという、これはちょっと肌がちがう、当時医学専門学校の教授ををしていた人で、熊本出身の、なかなか上品な紳士がいて、その邸宅へよく二人で遊びに行ったが、佐久間君にはその態度が少しぎざに見えたのか、おおちょっとやるよと言って、そこの手入れの行き

届いた座敷の縁側からジャーッと、例の寮雨を降らす。今でもその主人の迷惑そうな顔はおぼえています。<sup>17)</sup>

高木がここで語りたかったのは当時五高の独語教授であった佐久間政一のこと  
が主であって、Uと表記されている魚住のことではないが、二人の独語教授の性  
格が対照的に描かれていて興味深い。豪快で気性の荒い佐久間と上品な紳士で穏  
やかな魚住であるが、加えて東大独文科では佐久間は魚住にとっては1年上の先  
輩であったので、上記のようなことに対して迷惑だと思っても文句を言えなかつ  
たのだろう。その時期は、佐久間と高木の五高在任期間はそれぞれ大正3年8月  
～7年12月、同4年9月～9年7月なので、<sup>18)</sup> 大正4～7年頃と考えてよいであ  
ろう。なお高木と佐久間は二人でよく魚住の邸宅を訪れたとあるのは記憶されて  
よいだろう。

なお魚住はこの頃弓道を特技としていて、大正8年(1919)11月には学内の  
競射会で優勝したという。<sup>19)</sup>

魚住は大正10年(1921)3月31日、公立専門学校教授に任ぜられ、高等官六  
等を以て待遇された。そして熊本県立医学専門学校教授に補された。



ドイツ語教室棟(熊本県立医学専門学校卒業記念帖、大正10年)

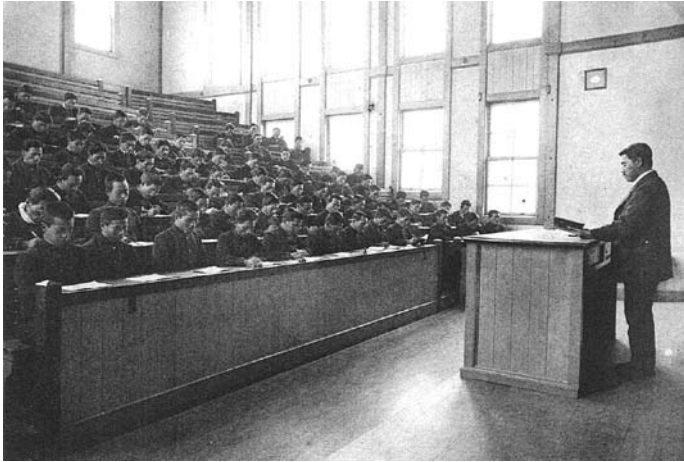


魚住 衛（大正10年）

### 熊本医科大学予科教授時代

「熊本医科大学予科は、熊本医科大学が熊本県立として運営されていた期間に、熊本医科大学に進学する学生に対する予備教育をほどこす目的で設立された教育機関である。」と『熊本大学医学部百年史』（通史編）は簡単に定義しているが、それが実現するまでは相当の紆余曲折があった。

魚住は熊本医学専門学校の大学昇格とそれに伴う予科設置が困難であったことを後に「生れ出るまで」（昭和6年3月発行『熊本医科大学予科記念誌』）の中で回顧している。最初に、大正8年（1919）12月に熊本県会において熊本医学専門学校を大学に昇格させる建議を可決してから、同11年（1922）7月先に専門学校の予科として入学させた第一学年80名、第二学年59名をそれぞれ大学予科の相当学年に編入するまでの経過を年譜で示した後、次のように語っている。



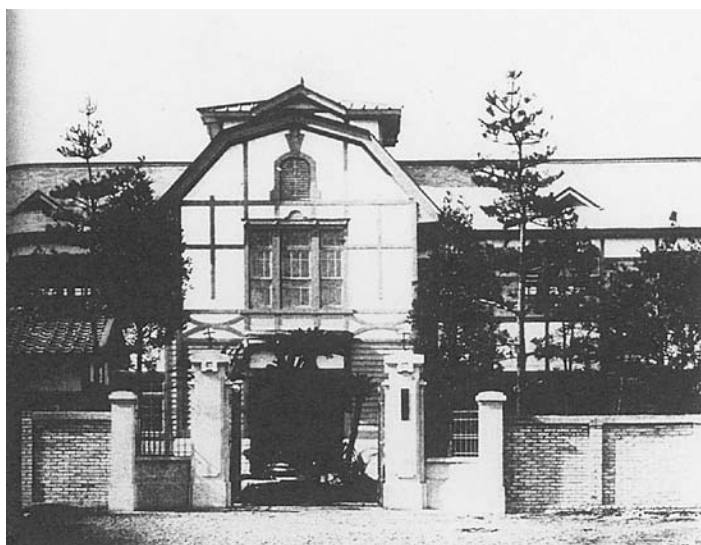
講義中の魚住 衛（県立熊本医学専門学校卒業記念帖，大正10年）

我等の大学予科が生れ出るまでの史的叙述の梗概は以上で尽きるかもしれないが、不幸にして我等の大学予科が生れ出たのは、尋常の分娩ではなかった、この間に言語に絶する「産の悩<sup>うみのなやみ</sup>」があった事は誰も想像し得る事であらう。もとより大学昇格の目的達成は、直接局に当られた県当局、先輩校友、学校当事者の方々が、熱誠を以て努力せられた賜で、其労苦の甚大であった事はいふまでもないが、学校内部にありて以前から予科設置に関する調査研究に従事してゐた私達も決して楽なものではなかった。（中略）勿論身体上の労苦などは、とるに足らぬ事で、茲にその一斑を示すために述べるのであるが、癒々急転直下大学昇格実現となると、まづ当面の問題となるのは予科に関する事であった。書類の作成など火急を要する事が多いので、徹夜して執務した事は一再ではなかった。（中略）かういったやうな激しい「産の悩<sup>うみのなやみ</sup>」があった上に、長い長い間の「懷妊の悩<sup>みごもりのなやみ</sup>」をも悩みぬかねばならなかった。

私達の敬愛措かざる故熊本医専校長谷口長雄先生が、久しく胸裡に蓄へて居られた移管昇格の熱望が漸く実現の可能性を帯びてきた時に、病疾のため病床に臥し、終に大正九年一月大学に昇格せしめんとする県議案県会を通過し

て、前途に光明を認め得た此時、先生は溘然として逝かれた。私達は真に暗夜に燈火を失った感がした。先生は病床にありても学校の運命に関しては夢寐にも忘れられなかった。(中略) 一体いつ頃から谷口先生の胸裡に大学昇格、それに付随して予科設置といふやうな希望があったかといふと、余程以前からの事で、大正七年の単科大学令の公布から癒々其決心を固められたやうに思はれる。(中略) 私は他の校用で東京地方へ出張を命じられた事があったが、其際先生は、私に対して秘密に、一つの特別任務を授けられた。それは「文部省に於て大学令を公布し単科大学を認める計画ありや否や」を探知して帰れといふ意味のもので、私は東京で相当苦心して、単科大学令の公布の準備あり、遠からず公布の運びになるであらう、といふ事を探知し得て、帰校の上其旨報告した事があった。

先生は其後私に対して屢々大学設置殊に予科新設について語られ、先生は予科は二年制とすべき意見をもってゐられた事もあったやうであったが、私



熊本医科大学予科正門（昭和2年）（熊本大学医学部百年史，通史篇）

はいつも三年制予科を主張した。この予科二年制論は其後も屢々問題となったが私は決して、三年制予科の主張は変へなかった。

繰り言めくけれど、我等の大学予科が「生れ出るまで」について、学校内部にありて親しく此事に関係したものは私の他には居ないから、此機会に思ひ出るまゝにかきつけて置く。

この魚住の回想は実際内部にいて予科設立に携わった者の証言として貴重であろう。

大正11年(1922)4月熊本医学専門学校の大学昇格が確実となるや、先ず同校予科生として後に認可を得て熊本医科大学予科生に編入さるべき生徒を募集し、

計	體	地	法	心	動	化	物	數	羅	英	獨	國	修	學
	操	質	制	理	植	理	理	句	語	語	語	文	身	科
三三	三	二	二	〇	二	〇	〇	四	〇	三	一二	四	一	第一學年
三一	三	〇	〇	二	二	三	三	三	〇	三	九	二	一	第二學年
三三	三	〇	〇	二	二	實 習	實 習	實 習	一	三	九	〇	一	第三學年

「学科課程表」 数字は週毎の授業時間数を示す



557名の志願者中より80名を選抜して入学を許可し、これを以て第一学年を編成し、熊本医学専門学校第二、第三学年中の志望者59名を以て第二学年を編成し、同年5月25日入学式を挙行了。その翌日に授業を開始した。

魚住は同年7月18日熊本医科大学予科教授に任ぜられた。これから昭和6年に予科が廃止されるまでの約10年間は独語教授としてまた学生主事として魚住にとって生涯で最も多忙かつ充実した時期であった。

「学科課程表」(『熊本医科大学予科記念誌』)によると予科の学科には次のものがあつた。

修身 国語漢文 独逸語 英語 羅典語 数学 物理学 化学 動植物学 心理学 法制経済 地質鉱物学 体操

中で最も重視されたのがドイツ語で、週時間数は第1学年12時間、第2学年及び第3学年それぞれ9時間で、計30時間であつたのに対して、次に多いのが数学で計10時間、その次の英語は計9時間であつた。このようにドイツ語の時間が他に比して多かつたのは(前頁の別表参照)、いうまでもなく明治以来の日本の医学がドイツの影響を強く受けていて、医学を学ぶにはドイツ語の知識が不可欠だと一般的に考えられていた結果であつた。だが『熊本医科大学予科記念誌』には使用教科書については全く言及がない。

「教養の方針」(『熊本医科大学予科記念誌』)の中で学科について次のように記している。

「大学予科の学科は大学令の定むる所に依り高等学校規程に準拠して教授すべきものなりと雖も本大学予科は熊本医科大学に進入すべき生徒を養成する機関なるを以て本大学予科学則に従ひ本大学に入るに必要な予備知識を与ふるを期し各科の内容に斟酌を加へ語学にありては独逸語教授の時間を多くし羅典語を課し、自然科学にありては物理学に於て特にレントゲン光線の性質及作用に関する学理を詳説して授け化学にありては有機化学を主とし無機化学は概要に止め代ふるに生物理論化学の大要を授け分析実習を二年より実施して応用分析を課し又自然科学科は実験実習に重きを置く等学則の本旨

に副ふ如く努めたり、…」

大学予科では語学（独語）が最重要視されたことは上述の通りだが、昭和4年（1929）の入学式で山崎正董学長が行った式辞<sup>20)</sup>でも語学の必要なることを説いている。即ち少なくとも英、仏、独語のうち1カ国語に精通すべきこと、中学及び大学予科で英独の2カ国語を併せて学んだのもこのために外ならぬこと、然るに医科大学を卒業する学生の国語、漢文、外国語の力を見ると実に力がないと述べ、大学に入っても外国語だけは常に怠らず学ぶことを切望すると結んでいる。

さて、『熊本医科大予科記念誌』において魚住は「夜襲」題して次のようなエピソードを語っている。

大正十四年の秋、第六師団秋季機動演習が、熊本市北郊で行はれて、学生隊の参加を許されたので、我校二百の健児は勇躍参加して、南軍に属して奮戦力闘した。

演習第一日は黒石原種畜場附近で壮烈な遭遇戦を行って、其夜は立田山山麓万石附近の畑中に野営した。其夜我学生隊は、黒石村落到宿営せる敵の歩兵聯隊本部に対して夜襲を敢行することに決し、山下小隊長は決死隊ともいふべき勇士の一隊を率ひて、水も漏らさぬ嚴重な敵の警戒網をどう潜り抜けるつもりか折柄の瀝青のやうな闇に吸ひ込まれるやうに野営地を出発して行はれた。

僕等は真っ暗い天幕の中に折々思ひ出したやうに遠くにきこゆる銃声に耳を立てながら、夜襲の成否を気遣って、息もつまるやうな緊張した気持ちで情報を待ってゐた。

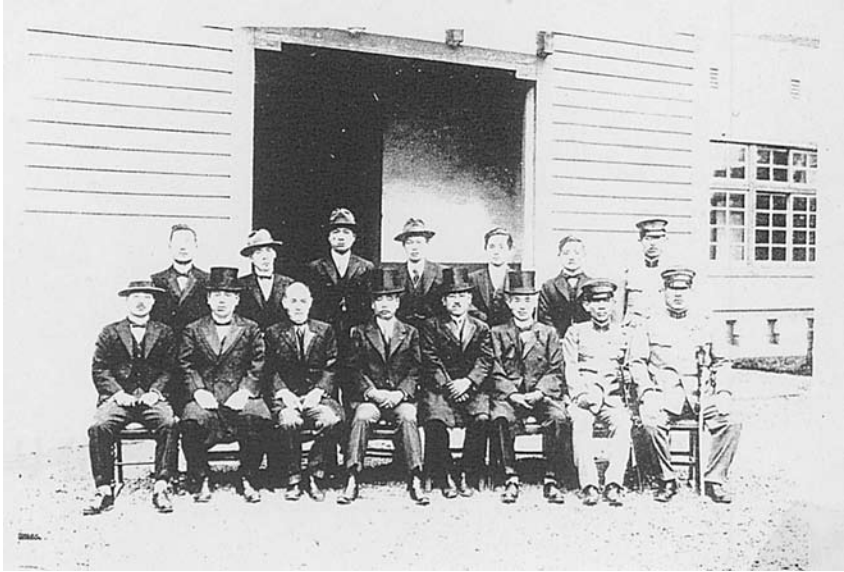
果然この夜襲は奇蹟的に成功して、本職軍人の心胆を寒からしめた。

僕は此報をきいた時思はず快哉を叫んだ。

翌朝は払暁からしとゞ降る冷雨を冒して振天動地の大接戦が行はれた。師団演習の最後の幕は閉ぢられた。

此師団演習の参加は僕にとって忘れ難い印象の一つであつた。

中川助教授	内田教授	青木教授	春木教授	林助教授	宮崎教授	山下助教授
渡邊助教授	古澤教授	次木教授	中澤主事	魚住教授	阿部教授	山下少佐



昭和4年紀元節後に会合した予科教授たち（『熊本医科大学予科記念誌』）

医科大生を引率して第六師団演習へ参加した思い出を忘れがたい印象として語っているのは魚住自身に大学卒業後、志願兵として歩兵第23連隊に服役した体験があったためであろう。

## 学生主事となる

昭和4年（1929）9月6日付で教授魚住衛は熊本医科大学学生主事に転任し、講師を嘱託せらる。学生主事は学長に次ぐ地位であり「主事ハ大学長ノ命ヲ受ケ大学予科ノ事務ヲ掌理シ職員ヲ監督ス」と定められた。独語授業以外にその方面

仕事が増えることになった。例えば昭和4年9月25日には千葉医科大学における学生主事会議に出席のため出張を命ぜられており、同6年8月2日には思想問題講演会出席のため東京へ出張した。

この時期魚津は『鎮西医海時報』第28号(昭和4年12月)に「○御奉拝記—魚住衛謹記」をはじめ、第47号(昭和6年5月)に「有史以前人類の疾患」(ドクトル メジチーネ クルト・ハイマン) 同誌第48号(昭和6年6月)に「現下の栄養問題」(ゲハイムラート プロフェッソール ドクトル カル・フォン・オルデン) の翻訳を發表しているが、文学記事ではなく、こうした医学関係の論文を寄稿しているのは医科大学の学生主事として立場からであろう。魚住が文学に関する論文・エッセイを書いたのは大学時代『帝国文学』に関わった時期と、熊本に帰った後の数年で、それ以後は殆ど發表しなくなった。

魚住は予科廃止後も学生主事を続けたが、それについては後述する。

昭和6年(1931)2月24日母千代子が亡くなり、<sup>21)</sup> 魚住家の菩提寺である安国禅寺に葬られた。長女で早世した和歌子と一緒に墓に眠っている。

## 大学予科の廃止

昭和6年3月31日を以て熊本県立医科大学及び大学予科は廃止された。前者は官立熊本医科大学となった。

『熊本医科大学予科記念誌』収録の「職員雇員及傭使名簿」、及び山崎正董『肥後医育史』(巻末資料)によると、魚住以外に次の人々が予科でドイツ語担当したことが分かる。前述のように予科ではドイツ語が最も時間数が多かったためにこれを担当する教員も常勤・非常勤を問わず一番多かった。

(イロハ順)

職務	氏 名	期 間
教授	阿部秀典	大11・7・18～
教授	伊東法俊	" 12・3・26～昭3・5・18
教授	春木良継	" 15・4・24～" 5・5・14

教授	上田茂次郎	〃 11・7・18～大14・5・12
講師	松尾精一	昭5・1・21～昭5・3・31
講師	ゲー・ハー・ドル	大14・11・31～
講師	フランツ・ヒューボッテル	〃 11・7・10～大14・3・31
講師	アンナ・ドル	〃 14・12・30～

簡単にプロフィールを紹介しよう。阿部は独逸学協会学校専修科の出身で、広島陸軍幼年学校から転任したドイツ語学者で後に熊本高等工業学校教授となった。伊東と春木は、専門は独語ではないが、ドイツ語も出来るということでこれを担当したのであろう。伊東は東大哲学科卒の文学士で、後年旅順工科大学予科主事を務めた。<sup>22)</sup> 春木は文学士及び法学士であった。上田茂次郎(1870-1945)は熊本市坪井の生まれ。済々黌を経て独逸学協会学校専修科を卒業。明治38年(1905)私立熊本医学専門学校助教授となり独語担当し、大正10年熊本県立医学専門学校教授となった。同校が熊本医科大学に昇格するとその予科教授に就任したが、同14年(1925)熊本薬学専門学校教授となり長年その地位にあった。<sup>23)</sup> 講師の4人はいずれも五高の教授や傭外国人教師とその夫人である。松尾精一(1887-1950)は熊本県玉名市生まれ。五高を経て東大独文科に学び、ここでは魚住の一級下であった。大正5年(1916)五高教授に就任。同14年文部省留学生としてドイツ渡独。五高の名物教授の一人。<sup>24)</sup> ゲー・ハー・ドル(G.H.Doll, 1882-1967)はミュンヘン大学出身。大正14年(1925)五高教師となり以後、昭和20年(1945)9月まで務めた。五高最後のドイツ人教師として生徒たちに親しまれ、深い印象を残した。昭和戦前期の熊本における日独交友に尽くした功績も大きい。<sup>25)</sup> フランツ・ヒューボッター(テル)(Franz Hübotter, 1881-1967)はワイマール生まれ。父は俳優。イエーナ、ハイデルベルク、ベルリン各大学で医学を学んだが、同時に中国語、満州語を学んだ。1914年医史学の教授資格を取得。第一次大戦後4年間日本へ行き、五高のドイツ語教師となった。この間東洋語や東洋医学史を研究した。五高を辞めてからは主に中国にあって研究に従事した。彼の東洋医学史の研究は世界的に知られている。<sup>26)</sup> アンナ・ドルは前記ゲー・ハー・ドルの夫

人。

なお、五高ドイツ語教授の宇佐美全賢は医科大学予科ではラテン語を担当した。

前述のように熊本医科大学予科は昭和6年3月末を以て廃止された。これ以後医科大学ではドイツ語は科目として行われなかったようである。『熊本医科大学一覧』(昭和10年度版)には独語に関する記述は全く見られないし<sup>27)</sup>、魚住の肩書きは学生主事だけであり、独語教授ではない。それは以後も同様であった。さらに大学事務部の学生課長も兼ねていた。上記一覧所収の「官立医科大学官制」第七條によると「学生主事ハ奏任トス大学長ノ命ヲ承ケ学生及生徒ノ指導監督ヲ掌ル」と定められている。学生部長と教務委員長を併せたような任務に就いていたと見られ、結構多忙であったと想像される。日本はその後日中戦争、太平洋戦争と暗く困難な時代を迎えたが、そのようの中で医科大学を維持し、発展させるには相当な苦労があったこと容易に想像できる。それでも昭和14年(1939)には将来を考えたのか、魚住家の菩提寺である熊本市横手町の安国禅寺に新たに「魚住家之墓」を建立した。

さて予科廃止後、『熊本医科大学一覧』からドイツ語に関する記述は消えたが、これは勿論医科大学生にドイツ語の知識が不要になったということでは全くなく、独語は入学前に五高など高等学校の理乙のクラスで学んでから入学するようになった。学則にも入学が許されるのは「高等学校高等科理科卒業者」と定められていた。志望者が定数を越える場合は選抜試験が行われた。

## 戦後独語教師として復帰

魚住が独語教師として復活したのは戦後になってからであった。履歴書によると、昭和19年(1944)熊本医科大学附属専門部教授に任命されているので、ここではドイツ語を担当したと想像されるが、確証はない。

履歴書によると昭和21年(1946)3月熊本医科大学教授を依願免本官となり、23年9月に第五高等学校講師を依嘱され独語を担当した。しかしこれは学制改革

により旧制高校が廃止されたため短期間で終わった。そして改めて26年に至り大学設置審議会の審査を経て、熊本大学法文学部講師となった。

『熊本大学職員録』(昭和28年10月現在)を見ると、法文学部の独語教員には独文第一講座に教授永松譲一、助教授福山四郎、独文第二講座に教授藤井外輿、講師松尾精一、独文第三講座に教授高野巽などがいた。講師の魚住は第三講座に属した。ここにあげた人々よりはるかに年長であった魚住が教授にならなかった理由は、年齢的に晩年で働き盛りをすぎている上に、新制大学の教員審査には教育研究業績が重視されたためと推察される。医科大学の学生主事を長年務めた魚住はその面で不利であり、不十分と判定されたのではあるまいか。また熊本大学法文学部教授陣には多く旧制五高の教員が就任した事実がある。前記の人々は高野が熊本高等工業専門学校教授であった以外、皆旧制五高の独語教授であった。

魚住は講師のまま昭和30年(1955)3月31日を以て定年退職した。退職後は、『熊本大学職員録』(昭和33年2月1日現在)では法文学部の「非常勤講師 魚住 衛 熊本市清水町140」として名があり、非常勤講師として独語を教えていたことが分かる。だが同一覧(昭和35年1月現在)にはもう魚住の名はない。このことから昭和34年(1959)頃が魚住が独語教師として活動した最後であったと推定される。

## 人となり

下吉正助著『熊本之事業人物』(昭和4年)の「魚住衛氏」(同書85頁)の項には「…学殖深く而も熱火の如き不断の研究は年と共に新進の知見と造詣を積み、其の懇篤にして明快なる講義と相俟って牢乎たる信望を鐘めてゐる」と記し、更に「熊本市外清水村の田園に居住し、学理の探求に精進一路しつつ、読書の余暇には土に親しんで園芸を楽しみ、或は山に猟し川に漁するのを趣味としてゐる」とある。『龍南人物展望』にも「…独語の外、映画教育についても一廉の見識を備へてゐる。熊本市の郊外に居住し、学理の探求に精進しつつ、読書の余暇には、土に親んで園芸を楽しむと言った、頗る恵まれた境地にある、夫人は民政党総務大

麻唯男の妹で、…」(同書378頁)とある。

魚住のことを知る人(例えば安国禅寺住職)が筆者に語ったのは真面目・穏やか・律儀などの言葉であった。既に紹介した高木市之助が『国文学五十年』の中で語っていた佐久間政一をめぐるエピソードが想起される。

栗崎了(元熊本大学文学部教授、故人)も生前筆者宛の手紙で「魚住先生にはママ教養部の教官控え室<sup>28)</sup>でお目にかかることが多かったのですが、口数が少なく、温厚な方で、今でも時々思い出します。お嬢さまとは連絡がとれたでしょうか。先生は老後を考えてでしょうか、佐賀に移られました。そのため、蔵書を寄贈したいと申し出があり、私ともう一人の同僚とでお世話したことがありました」と語っている。



魚住家の墓と法名塔

(安国禅寺, 熊本市中央区横手3丁目26-8) 筆者撮影



## 墓 所

魚住衛は熊本大を退職してからは、将来のことを考えてか、次女（廸）の夫が熊本から新潟に転勤したのを機に佐賀に住む長女・魚住斐子<sup>あや</sup>の許に身を寄せたが、昭和46年（1971）6月3日同地において死去した。享年84才。葬儀も佐賀で執り行われたが、遺骨は遺族の手により郷里の熊本に運ばれた。

墓所は熊本市中央区横手3丁目26-8番地の安国禅寺にある（前頁の写真参照）。同寺は魚住家の菩提寺である。墓石の正面に「魚住家之墓」と刻まれ、裏面に「昭和十四年五月 魚住衛建之」とある。そして右側には円柱の法名塔があり次の名前が刻まれている。（原文縦書き）

孟春院楨純清香大姉

昭和廿七年二月二日 衛次女 楨 三十才

徳光院梅園薫方大姉

昭和四十六年一月四日 衛妻芳江 七十六才

修徳院俊翁道賢居士

昭和四十六年六月三日 魚住 衛 八十四才

陽春院徳翁元照居士

平成二年三月十七日 魚住元男 七十七才

芳秋院元室玉斐大姉

平成九年八月十四日 元男妻斐

瑞峰院慈明祥秀居士

平成十八年十二月十六日 魚住祥三 六十一才

玄冬院安岳正閑居士

平成二十年十二月十七日 魚住雅男 六十七才

なお、近くには大正7年11月7日に他界した父魚住賀衛の墓と、母千代子と9才でなくなった亡くなった長女和歌子（衛の姉）と一緒に眠っている墓もある。

## おわりに

魚住衛は熊本で生まれ、教育も濟々黌、五高と地元で受け、大学時代の3年間は東京で過ごし熊本を離れたが、卒業後は再び郷里へ戻り、私立熊本医専の独語教師となって以来、ずっと熊本に住み、熊本医科大学予科教授を経て、戦後も五高、熊本大学法文学部で独語を教え続けた。彼は留学もしなかった。文字通り彼は熊本のドイツ語教育のために一生を捧げた人であった。また熊本医科大学ではその誠実で、真面目な性格を見込まれ、学生主事を長く務めた。その間には世界大戦など困難な時期もあったけれど熊本医大の維持・発展に努めた功績も大きい。

拙稿を書き終えて改めて思うことは、語学教師に対する一般の関心の低さである。それは生前中央で華々しく活躍し、すぐれた業績を残した人も例外ではなく、その人が一度没すると急速に忘れられてゆく。ましてや魚住のように地方にあって、真面目に地味に教場で語学を講義し続けた人の場合、なおさらそうである。現に魚住に関する論文やエッセイはこれまで一編も書かれていない。確かに語学教師の一生に波乱などあろうはずがなく、一般の興味を惹かないかもしれない。だが、近代日本の発展のために尽くした語学教師の役割は決して小さくはないと思う。いわゆる洋学なるものは主として洋語学者を通じて導入された。日本独学史を専攻する者として今後もそうした忘れたままになっている独語・独文学者に光を当て紹介したいと思う。

### 魚住 衛略年譜

明治19年7月6日	熊本県飽託郡清水町津浦140番地(当時)に生まれる
” 38年3月	熊本県立熊本中学濟々黌卒業
” 38年9月	第五高等学校(一部)入学
” 41年7月	同上卒業
” 41年9月	東京帝国大学文科大学独逸文学科入学
” 43年8月	帝国文学会委員となる
” 44年7月11日	東京帝国大学文科大学独逸文学科卒業

大正元年12月 1 日	一年志願兵として歩兵第23連隊入隊（至大正 3 年 5 月30 日）
" 3 年 8 月24日	私立熊本医学専門学校教授（ドイツ語担当）兼生徒監就任
" 6 年	家督を相続
" 10年 3 月31日	公立専門学校教授に任ぜらる（高等官 6 等待遇） 熊本県立医学校教授に補さられる
" 11年 5 月15日	ドイツ語高等教員免許状を受領す
" 11年 7 月18日	公立大学予科教授に任ぜられる 熊本医科大学予科教授に補される
昭和 4 年 9 月 6 日	熊本医科大学学生主事に任ぜられる
" 4 年 9 月25日	学生主事会議に出席のため千葉医科大学へ出張を命じられる
" 6 年 8 月20日	思想問題講演会出席のため東京へ出張を命じられる
" 14年	魚住家の菩提寺である熊本市の安国禅寺に魚住家之墓を建てる
" 16年10月 4 日	勅任官を以て待遇される
" 19年 5 月12日	熊本医科大学附属医学専門部教授に任命される
" 21年 3 月20日	叙高等官 2 等 依願免本官
" 23年 9 月13日	第五高等学校講師を嘱託される。謝金月1250円
" 23年11月22日	教職員適格審査合格
" 24年 3 月31日	講師嘱託を解かれる
" 26年 9 月28日	大学設置審議会の審査の結果講師と判定（非常勤）
" 26年10月 1 日	熊本大学法文学部非常勤講師
" 27年 6 月25日	大学設置審議会の審査の結果講師と判定される
" 27年 7 月 1 日	文部教官に採用（12級 3 号），熊本大学法文学部講師となる
" 28年 4 月 1 日	12級 4 号俸を給せらる
" 30年 5 月31日	定年退職
" 46年 6 月 3 日	佐賀市において死去

## 注・参考文献

- 1) 筆者が参照した魚住衛の履歴書は、熊本大学総務部人事課に保管されているもの、五高記念館蔵『教員履歴』に含まれているもの及び『帝国大学出身名鑑』（昭和 7 年）所載の三種である。

- 2) 熊本大学五高記念館蔵。
- 3) 『済々黌百年史』164頁。
- 4) 黒田源次 (1886-1957) 熊本市生まれ。済々黌、五高を経て京都大学文学部へ入り心理学を専攻。後、同大学医学部で生理学を学び、医学部の副手となった。ドイツ留学後、大正15年満州医大教授となった。彼の研究は多方面にわたり心理学、医学、考古学、美術史に及び、晩年は奈良国立博物館長を務めた。また日独文化交流にも貢献し、1931年から34年までベルリンの日独文化協会の会長を務めた。
- 5) 長江藤次郎 (1870-1934) 東大独文科卒。山口高、五高の独語教授を務めた。明治四十五年文部省留学生としてベルリン、ボン、ミュンヘン各大学で学んだ。
- 6) 『会員名簿』(五高同窓会、昭和14年10月現在) では飯田の勤務先と住所の欄は空白になっている。46頁。
- 7) 明治41年10月号『帝国文学』(第14巻10号)の「帝国文学会広告」に新入会員として魚住の名が見える。因みに、この時一緒に会員となった人に後年独語独文学界で活躍する野村行一や佐久間政一がいた。なおこの記事によると、魚住の東京での住所は「本郷区5丁目37、成蹊館」となっている。
- 8) 櫛村という号は、生家のある熊本市清水町津の浦の一帯には櫛(ハゼ)の木が多かったことに由来すると思われる。
- 9) 『芸文』(京都文学会)第2年11・12号(明治44年11月)は「詩人クライスト記念号」とした。
- 10) ベルンハルト・ケラーマン (Bernhard Kellermann, 1878-1951) ドイツの作家。批評家。
- 11) ユリウス・パウプ (Julius Bab, 1870-1937) ドイツの劇評家、演劇史家。
- 12) 『芸文』(京都文学会)第4年3号(大正2年3月)は「詩人ヘッベル誕生百年記念号」として発行された。これは巻頭にヘッベル研究家として頭角を現してつつあった吹田順助の「ヘッベル評伝」を置き、全編ヘッベル関係の記事で満たされている。
- 13) 大正元年11月号『帝国文学』は「委員新任」と題して、「久しく本誌上に健筆を振はれたる前委員佐藤貞治郎は第三高等学校に赴任のため、同魚住櫛村君は一年志願兵のため何れも九月末日を以て辞任…」と報じた。
- 14) 成田秀三 (1881-没年不詳) 青森県生まれ。明治43年東京帝国大学文科大学独逸文学科を卒業。同43年私立熊本医学専門学校教授兼私立九州薬学専門学校教授、大正4年東北帝国大学札幌農科大学予科教授に転任となり、昭和6年富山高専学校教授に就任した。
- 15) 『熊本医学専門学校ノ学則改正』(『鎮西医報』154号、大正3年7月)
- 16) 佐久間政一 (1885-1949) ドイツ語学者。千葉県生まれ。一高を経て、明治42年東大独文科卒。東北帝大農科大学予科教授を経て大正3年8月から7年12月まで五高教授を務めた。後に長く二高教授を務めた。『独逸文法講話』などドイツ語関係の注釈本、参考書、訳本、教科書が多数ある。
- 17) 高木市之助『国文学五十年』岩波新書、96-97頁。

- 18) 『五高五十年史』所収「任命順職員一覧表」による。
- 19) 『熊本医学専門学校校友会雑誌』第30号（大正9年4月発行）の「雑報」欄は11月31日の「優勝祝賀競射会」で魚住教授が優勝したと報じている。
- 20) 山崎正董「新入生を迎えて——宣誓式告辞」（『鎮西医海時報』23号，昭和4年5月）
- 21) 昭和6年3月号『郷友雑誌肥後』の「時報」欄は次のように報じた。  
「魚住衛氏母堂 熊本市外清水村津浦（熊本医科大学学生主事）魚住衛氏母堂千代子刀自は  
予て病氣加療中の処の処二月二十三日に逝去した。」  
なおその死は『鎮西医界時報』（昭和6年3月）では24日死去と報じられた。
- 22) 学士会『会員氏名録』（昭和16年用）35頁。
- 23) 詳しくは拙稿「熊本薬専教授上田茂次郎」（上村『九州の日独文化交流人物誌』，2004）を参照。同書90-91頁。
- 24) 詳しくは拙稿「熊本の日独交流人物誌」（『熊本日独協会創立45周年記念誌』，2007）を参照。同書28-29頁。
- 25) 詳しくは拙稿「第五高等学校外国人教師履歴」（上村『九州の日独文化交流人物誌』，2004）を参照。同書165-167頁。
- 26) 詳しくは拙稿「東洋医史学者フランツ・ヒューボッター博士」（『日本古書通信』695号，昭和62年3月）参照。
- 27) 筆者が参照した『熊本医科大学一覧』昭和11年版，同12年版，同13年版及び同「自14年至15年」版においても独語に関する記述は見られない。
- 28) 熊本大学に教養部が設置されたのは昭和39年（1964）のことで，その時点では魚住は非常勤講師を辞めていたので，栗崎氏の記憶違いであろう。厳密には教養科目担当の非常勤講師室のことであろう。

付記：魚住氏家系図については魚住衛の甥に当たる魚住秀男氏（豊田市在住）より資料の提供を受けた。また熊本大学の五高記念館と肥後医育記念館には写真資料などで大変お世話になった。記して謝意を表したい。